

藤並の森

Vol. 80

(作家／川村学園女子大学特任教授)



▲上橋菜穂子さん近影

リレー随筆

「四国の伯母ちゃん」が暮らした地で——上橋 菜穂子

私には、「四国の伯母ちゃん」と呼んでいた伯母がいます。父の姉にあたる人で、戦時中は満州で、戦後は高知で暮らしていました。

実は、私は一度もこの伯母に会ったことがありません。電話で話したことはあったのですが、とうとうその顔を拝見することなく逝かれてしまいました。

それでも、時折、この伯母のことをしみじみと思い出すことがあります。幼い頃、この伯母が「竈の虫」と呼ばれていたと父から聞いたことがあり、そのエピソードが、ずっと胸の深いところに刺さっていたからです。

父は昭和6年に福岡で生まれました。十人兄弟の末っ子でした。末っ子の父にとつて、年の離れた姉たちは、物心ついたときにはもう大人で、遠い人たちだったようです。ですから、父が語った話は、いわゆる「家族内の二つ話」だったのかもしれない。「四国の伯母ちゃん」は幼い頃から本を読むのが大好きだった。

家の手伝いをさばっても本を読むとするので、家事をおろそかにする、と叱られると、しぶしぶ竈のところに行くのだが、うまくご飯を炊くことが出来なくて、竈の前にしゃがんで、すすり泣くんだそうだ。

その声が聞こえてくると、おお、おお、また竈の虫が泣いている、と笑われたそうだ。

この話を聞いたときに、幼いながらも、私は胸が、ぐん、と重くなるような哀しさを感じたものです。私もまた、親から隠れてでも本を読みたい子どもでしたから。お手伝いから逃れて、ただただ、ずっと本を読んでいくと、知恵を絞っていたものです。

母は私にたくさん本を読んでくれましたし、父も読書が好きな人でしたが、私の本好きは、いささか度が過ぎていましたから、親は不安になったのでしょう。

いまの子どもたちが「ゲームばかりして」と叱られるように、私は「本ばかり読んで」と叱られていました。そういう状況の中で聞かされたのが、「竈の虫」の話だったのです。

この話を聞かされたときは、なにしろ伯母ちゃんが可哀想で、飯炊きが出来ないと思われる時代に生まれなくて良かった、と思ったのですが、いま思い返してみると、そのとき私は、そういう同情や反発の気持ちとは少し異なる思いも心に宿していたようです。

多分、私は初めて気づいたのです。自分が好きなことだけに熱心で、その他の、人が暮らしていくために大切なことを無視して、逃げていたことに。そして、そのことを恥ずかしい、と思ったのです。

外の世界で生きた経験がなければ、本の世界も充分にはわからない。そういう思いが、やがて、自分の歩みの方向を決める道標になっていきました。私は文化人類学者として海外でフィールドワークをしながら、物語を書くようになりましたが、私が作家になったとき、「四国の伯母ちゃん」は大喜びをしてくれました。

多くの人に導かれて生きてきた私の道程を「四国の伯母ちゃん」が暮らした高知の文学館で展示していただけということに、不思議な縁を感じずにはいられません。

展示会を楽しんでいただければ幸いです。

会 展
紹 介
Exhibition

上橋菜穂子と「精霊の守り人」展

平成30年
1月27日(土)

3月25日(日)
企画展示室

観覧料500円

「上橋菜穂子と「精霊の守り人」展
—上橋菜穂子の描く壮大な作品世界を通して、「本物の物語」の面白さに触れる—

上橋菜穂子さんは、1989年の作家デビュー以来、『精霊の守り人』『獣の奏者』『鹿の王』など数々のベストセラーを発表し、2014年には、児童文学における最高の賞である、国際アンデルセン賞作家賞を受賞しました。日本人では、2人目の栄光です。さらに、2015年には本屋大賞を受賞。文化や価値観の異なる人々が織りなす世界を鮮やかに描き上げる上橋さんの作品は、世界的にも高く評価され、幅広い年齢層の読者から熱烈な支持を集めています。本展は、代表作『精霊の守り人』シリーズに描かれる多文化共生を軸として、その卓越した物語世界を紹介する初の大規模な展覧会です。日本が誇る物語の紡ぎ手・上橋菜穂子さんの全国巡回展は中・四国初開催となります。シリーズ関連資料や文化人類学の研究資料、本展のために語り下ろしたインタビュー映像、TVドラマ資料、アニメ化・漫画化された作品が、作家自身の解説とあわせて展示されます。ファンタジーや児童文学の枠をはるかに超えた、あらゆる世代に開かれた「本物の物語」が、ここにあります。魂をゆさぶられる物語世界の面白さを、この春、高知県立文学館でお楽しみください。

●「精霊の守り人」について

非情の世界を生きる女用心棒バルサと、皇子であるがゆえに苦悩し、精霊に翻弄される少年チャグムー2人の運命を軸に、異界と人の世界が交差するハイファンタジー。

天から俯瞰したような壮大な世界観と肌感覚を呼び起こす細部をあわせもち、日本ファンタジーの金字塔となった「守り人」シリーズは、全12巻からなる壮大な物語。1996年から11年にわたって出版され、累計400万部を突破するベストセラーとなっています。また、英語のみならず、スペイン語、イタリア語、中国語などに翻訳され、世界中にファンを持っています。2016年3月より、NHK大河ファンタジーとして「守り人」シリーズがドラマ化。3シーズンにわけ、複数年にわたって放送されました。主演は綾瀬はるかさん。その他にもアニメ「精霊の守り人」(2007年にNHKで放送。全26話)や漫画「精霊の守り人」(藤原カムイ/月刊ガンガンに連載)、漫画「闇の守り人」(結布/Neumukiに連載)など、「守り人」の世界は、ジャンルの垣根を越えて広がっています。



▲絵◎佐竹美保
《サグとナユグー混じり合う世界—》

●上橋菜穂子 (うへはし・なほこ)

作家/川村学園女子大学特任教授
1962年、東京都生まれ。オーストラリアの先住民アボリジニを研究。89年、『精霊の木』で作家デビュー。野間児童文芸新人賞と、産経児童出版文化賞ニッポン放送賞、米図書館協会バチェルダ賞などを受賞した『精霊の守り人』をはじめ著書多数。2014年に国際アンデルセン賞作家賞、翌年『鹿の王』で本屋大賞を受賞。2016年春より、「守り人」シリーズがNHK放送90年大河ファンタジーとしてドラマ化された(主演:綾瀬はるか)。

*国際アンデルセン賞

国際児童図書評議会(IBBY)が主催する賞で、永続的に児童文学に貢献する作家に対して、隔年ごとに贈られる。「児童文学のノーベル賞」と称され、世界で最も権威ある国際児童文学賞である。上橋菜穂子さんの作家賞受賞は、日本人として、まだみちお氏に続く二人目の栄誉となる。



▲「守り人」シリーズ全12巻、偕成社/画:二木真希子、佐竹美保

構成

●STEP1 ささまざまな境界、その向こう側

高校生の上橋さんは、学校の英国研修旅行で、同国の児童文学者ルーシー・M・ボストンらの作品世界を肌で感じ、自らも作家になりたいという思いを深めます。その後、大学院で文化人類学の研究を続ける一方で、物語の創作にも取り組み、1989年に作家デビューしました。以降、価値観や文化の異なる人々の姿を鮮やかに描いた物語をつくりあげています。ここでは、「守り人」シリーズに見る多文化共生を手掛かりとして異文化体験になぞらえ、物語世界の扉を開きます。

【展示内容】

○ボストン夫人からの手紙/○「精霊の守り人」原稿
○アンデルセン賞その他受賞関連資料、映像、ほか

●STEP2 生と死の境界、究極のサバイバル

用心棒のバルサは、新ヨゴ皇国の宮殿から第二皇子チャグムを連れて逃げることにしますが、彼女は一刻を争う危険な状況で、どのような装備を整えたのでしょうか？

生と死の境目を一瞬の判断でぐぐり抜ける闘いを生き抜くために、普段からどのような備えをしていたのか、また彼女が対峙する追手の周到な追跡の様子を、テキストなどから探ります。

【展示内容】

○「守り人」シリーズに見る「備え」「追跡」テキスト資料
○バルサの装備再現(油紙、竹、縄) ほか



▲国際アンデルセン賞作家賞 メダル
(2014年)

展覧会 紹介

上橋菜穂子と「精霊の守り人」展

平成30年
1月27日(土)
▼
3月25日(日)
企画展示室
観覧料500円

●STEP 3 「守り人」の世界、その多様性

「守り人」シリーズの読者は、登場する国と人々の多様性に驚かされます。まるで目の前に物語が見えているかのように紡ぎ出される上橋氏の物語世界は、シリーズを通して壮大な歴史絵巻として立ち上がります。ひとつの価値観が導くひとつの考えが、必ずしも常に正しいとは限らない「守り人」シリーズに登場する多くの人物が、そのことを私たちに語りかけてくれるのです。ここでは、シリーズで描かれる多様性を、さまざまな角度から紹介します。

「展示内容」

○担当編集者宛ての書簡／○挿絵原画
○執筆時の参考資料 ほか

●STEP 4 物語とともに生きる

幼い頃から本に親しんでいた上橋さん。人を惹きつける物語を書くには説得力ある描写が必要であり、そのために「未来の作家」は実際に物事を確かめる経験を得なければなりません。大学で文化人類学を学んだ上橋さんはフィールドワークに没頭。一方で、「物語」は彼女の内から生まれるきっかけを待っていました。1989年の作家デビュー以来、フィールドから、さまざまな旅や日々の暮らしから、数多くの経験を吸収し、豊かな物語を紡ぎだしてきた上橋さん。その軌跡をたどります。

「展示内容」

○文化人類学の関連資料
○影響を受けた本や、高校時代に書いた創作劇の脚本
○本棚再現／○旅先で購入した品々
○「鹿の王」生原稿 ほか

●STEP 5 境界、そこはフロンティア

上橋さんは、人々が把握しない「未知の部分」を物語に残しています。それによって読者は、物語の先にさらなる広がりを見出せるのです。「守り人」シリーズは、単行本を彩る挿絵をはじめテレビドラマ、アニメや漫画など、ジャンルを超えたクリエイターたちによる新しい表現が行われています。作品世界の豊かさに加え、「未知の部分」を物語が持っているからこそ、多方面に広がりを見せるのかもしれない。

「展示内容」

○単行本のカバー、挿絵／○文庫本のカバー／
○ドラマ関連資料／○アニメ関連資料
○漫画原画 ほか

●その他の展示

◆映像インスタレーションコーナー

幻想的な映像インスタレーションで、異界「ナユグ」を体験できるコーナーが設置されます。ナユグは「守り人」作中で描かれる異界で、「異能者」や「呪術師」などの特別な能力がないと見ることができないとされています。

◆ドラマ「精霊の守り人」の衣装紹介

ドラマ「精霊の守り人」で実際に使用されている衣装や小道具などを特別に展示します。

◆2Fロビー・常設展

ロビーにはバルサに扮して「バルサの槍」と写真撮影できるフォトスポットを設置します。これであなただけのバルサになるさ！
VR(ヴァーチャリアリティ)でドラマ「精霊の守り人」のワンシーンを体験できるコーナーや、スタンプラリーなど、「守り人」の世界を様々な角度からお楽しみいただけます。
(学芸課／谷岡真衣)

関連企画

■「精霊の守り人」ブックトークツアー

高知こどもの図書館でブックトークの後、ご飯屋・おねおねで「守り人」シリーズをイメージしたお食事。
開催日/平成30年3月4日(日) 10:00～13:00(定員15人)
参加料/事前申込。当日観覧券と1500円(昼食代)

■ワークショップ「シグ・サルアのハーバリウム作り」

『精霊の守り人』に登場する、新ゴ皇国山奥の青池に咲く「シグ・サルア」をイメージしたミニ・ハーバリウムを作ろう！
開催日/平成30年2月11日(日)、2月18日(土)、3月21日(水・祝)
各日とも14:00～16:00(定員20人) **満員御礼!**
参加料/事前申込。当日観覧券と材料費500円



■ワークショップ「ナユグの石を作ろう!」

もうひとつの世界「ナユグ」をイメージしたレジン工作です。
開催日/平成30年2月25日(土)
各日とも10:00～12:00、14:00～16:00(定員15人) **満員御礼!**
参加料/事前申込。当日観覧券と材料費300円



■「精霊の守り人」スタンプラリー

文学館内に設置されているスタンプを集めて「精霊の守り人」の世界を冒険しよう!

その他の関連企画 (予約不要)

- ・「精霊の守り人」オリジナル本の帯展示・展示解説(毎週土曜日午後1時30分～ ※3/10はおやすみ)
- ・ティーチャーズデー(学校教員向け展示解説)・朗読の会(2月17日 上橋菜穂子の作品を読む)
- ・木洩れ日コンサート(3月11日 NPO法人 こうち音の文化振興会)

団体向け展示解説は無料で行います。お気軽にお問い合わせ下さい。要観覧料、団体割引等あり

常設展 虫

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「自由民権」コーナー・中江兆民、「反骨の大衆文学」コーナー・田岡典夫、「現代の文学」コーナー・田宮虎彦、「近現代の詩歌」コーナー・若尾瀧水をご紹介します。

展示作家紹介 田宮虎彦

田宮虎彦は戦後に活躍した作家で、暗い体験を越えた清冽な叙情が特徴です。

虎彦は1911(明治44)年、共に高知県出身である田宮昂之・鹿衛の次男として東京に生まれました。祖父が寺田寅彦の父と親しく、寅彦にあやかうと「虎彦」と名付けられたそうです。船員だった父に付いて下関、姫路、神戸と転々とし、1919(大正8)年には母の里である高知県香宗村(現・香南市)で約一年間過ごしています。

肺炎カタルを患うなどの苦難もありましたが、東京帝国大学を卒業、都新聞社ほか教師、拓務省などの職に就きました。1947(昭和22)年に小説「霧の中」を発表し注目されるようになります。その後「絵本」が芥川賞候補となりますが、芥川賞を超えた作家として見送られ、のちに「絵本」を含む単行本『絵本』は毎日出版文化賞を受賞しました。その後も『落城』『菊坂』など次々に発表、亡き妻との書簡集『愛のかたみ』はベストセラーになりました。

1988(昭和63)年4月9日、東京青山の自宅マンションで自殺。76歳でした。



▲展示風景



虎彦の作品は今読んでも面白いのですが、今回注目したのは「霧の中」「落城」「足摺岬」など、会津藩をモデルにした「黒官藩もの」です。そこには徹底的な敗北が描かれ、繰り返される戦争の愚かさや無常、そして生への微かな希望を際立たせています。特に封建的な家長長制、その頂点にある天皇制への批判的な視点が見られますが、それは戦後という時代が色濃く反映されていると同時に、葛藤のあった父との関係性が重ねられていると指摘されています。

この展示は「志国高知 幕末維新博」の関連コーナーです。展示では虎彦の珠玉の歴史小説の他、自筆原稿「ある恐れに」「私について」「歴史小説と史伝」などの貴重な資料をご紹介します。(学芸課/川島禎子)

シリーズで、変わる常設展示をご紹介します！
今回は田宮虎彦の歴史物、
若尾瀧水の知られざる後半生をご紹介します。

展示作家紹介 若尾瀧水

若尾瀧水は俳人であり、土佐文人研究者としても知られています。

瀧水は1877(明治10)年、吾川郡弘岡下ノ村(現・高知市春野町)に生まれました。高知県尋常中学校を卒業後、京都三高に入学。子規門下であった寒川鼠骨を訪れ、俳句の道に足を踏み入れます。翌年には正岡子規の門人となり、根岸庵句会や奥羽百文会に参加、新進気鋭の俳人として注目されていました。

1902(明治35)年に子規が亡くなり、俳誌「木兎」に「子規子の死」を発表したことで、瀧水の人生は暗転します。「子規子の死」は子規、そして子規を偶像化する周囲への批判を含む内容でした。結果、瀧水は俳壇から排斥されます。しかし瀧水の文は、血気にはやった部分はあるにしても、他の弟子と違う「批評」であり、子規に迫る論考として現在では評価されています。

瀧水は東京帝国大学法科卒業後に帰郷。土佐の文人・中山高陽らへの関心を深め、以後収集と執筆に専念します。多病で孤独、漂浪の生活の中大衆に迎合せず、気韻のある作品を描き続けた高陽に、瀧水は深い尊敬と親近感を抱いていました。瀧水自身も写生を始め、画業に精進しています。一方で俳句への情熱も止まず、1921(大正10)年から2年ほど「筆を折り生活を忍受する今の境遇からの離脱」という切実な

思いで創刊された俳誌「海月」を主宰、後進を指導しました。

1961(昭和36)年、12月1日死去。85歳でした。

「子規子の死」が有名すぎて、高知時代の瀧水のこととは一般に知られていませんが、当館には高知の俳壇や文人研究に大きく貢献した瀧水の仕事ぶりを示す資料があります。展示では晩年にも注目、瀧水自筆の画や俳誌「海月」、子息によって出版された文人研究『海南先哲画人を語る』などをご紹介します。(学芸課/川島禎子)



▲展示風景

佐川・高吾の文化運動 — 明神健太郎の周辺 — 猪野 睦

明神健太郎という名を記憶している人はどれほどだろうか。佐川出身の歌人であり郷土史家だった。1985年、79歳で亡くなった。佐川文化をほりおこし、佐川町の人たちの歌集をつくり、佐川にこもり高吾文化をになった人だった。

1932年、田村乙彦らとガリ刷りの「田園の花」をはじめ地域に根ざした短歌をかい。25か26歳のときだった。この「田園の花」は村の青年団機関誌ということで始めたが、農民運動にかかわっていく田村乙彦らの検挙でつぶされた。明神健太郎は近くで支援のような役割を果たしていたが、田村乙彦、藪田忠夫らの運動は検挙の対象とされた。

◀ 貴重なガリ刷りの「田園の花」

明神健太郎も麦之助というペンネームで「紙すきの業にやぶれて家も田も売りはらいたる亡父がこと聞く」などを「田園の花」に残している。

この幻の「田園の花」をたずねて明神健太郎をたずねたのは1960年前後だった。佐川町の花畑という地名の土讃線がすぐ前を通る一軒家だったが、そこで「田園の花」の時代のことを聞いた。勤めていた銀行を退職して、佐川文化を調べ、歌集もだして静かに暮らしていた。

この佐川町内むけにつくられ配付したガリ刷り「田園の花」は質が高かった。戦後になつてそこに載せた藤原運のペンネーム西森輝生でかいた「章魚人夫」、広海大治で「文学案内」にかいた「サガレンの浮浪者」があった。「サガレンの浮浪者」は40年あまりたつて「言葉の砂金」と評され「日本プロレタリア文学体系」に収録された。当時は検挙よけもあつて、皆いくつものペンネームを使っていた。

藤原運は昭和のはじめ北海道へゆき、そこからサハリン、当時の植民地だった樺太へ渡り、そこでのすさまじい鉄道開発工事を詩にした。戻った高知で検挙され、満州へ渡り、敗戦引揚げ、また北海道へ渡り没した。自作の高い評価も知らないままだった。「田園の花」の田村乙彦はビルマで、藪田忠夫はニューギニアで戦死、明神健太郎は中国戦線から帰還した。明神健太郎が、戦後、佐川文化をほりおこし、埋もれてきた戦中戦後の町内短歌をほりおこし、歌集にまとめていったのは、時代への深い鎮魂の思いもあつたのではないか。静かな語り口にそんな印象が今も残る。

(詩人)

資料受贈報告

— 寄贈資料から —

森下雨村探偵小説選Ⅱ

〔論創ミステリ叢書110〕

森下雨村著 湯浅篤志編

論創社刊

2017(平成29)年12月

389頁 論創社寄贈



受贈報告(平成29年11月〜12月) 敬称略

▼藤原緋沙子・茶筌の旗 藤原緋沙子著 新潮社刊)他

▼嶋岡 晨・詩と音楽のための洪水 第20号 池田康編

洪水企画刊)

▼中脇初枝・定本 漱石全集 第8巻 月報8 岩波

書店編刊)

▼別役佳代・土佐史談 第265号 抜刷 東声橋田

丑吾・秋水を結ったその生き方 別役佳代著 土佐史

談会刊)

▼小松弘愛・中四国詩集・二〇二七 中四国詩集編集

委員会編 中四国詩人会刊)

▼楠瀬勉久・詩集 SHORT STORY POEMS

枝葉末節 根津真介著刊)

▼叶岡淑子・歌文集 深夜のモーツァルト 叶岡淑子

著刊)

▼千光寺昭子・句集鳥鈴 千光寺昭子著 沖積舎刊)

▼岡本篤志・紙芝居 きんりのうま おかもとあつ

し脚本 伊藤秀男絵 童心社刊)

▼松山子規会・松山子規事典 松山子規会編刊)

▼日本歌人クラブ・日本歌人クラブアンソロジー

2017年版現代万葉集 日本歌人クラブ編 NHK

出版刊)

▼河出書房新社・おいしい文藝 こぼこぼ、珈琲 杉田

淳子他編 河出書房新社刊)

森下雨村(1890〜1965)は翻訳家、小説家。大正9年、博文館の探偵小説雑誌「新青年」の初代編集長となり、海外探偵小説を翻訳・紹介する傍ら、江戸川乱歩ら日本の探偵小説家の才能も発掘。探偵小説の育ての親と言われ、探偵文壇創設に不朽の業績を残した人物です。

『森下雨村探偵小説選Ⅱ』は、大正12年から昭和11年にかけて発表された創作探偵小説の単行本初収録作品を中心に厳選。複数のペンネームを駆使し、幅広い作風で読者を魅了し続けてきた雨村の作品をより堪能できるようにと編集されたものです。本書は、創作篇と評論・随筆篇で構成されており、探偵物を中心とした小説11作品とエッセイ等5作品が収録されています。

編者解題によると、雨村は読みやすさ・わかりやすさを重視した「軽い文学」を提唱し、探偵小説が万人に受け入れられ、気軽に楽しんでもらえるようにと、常に読者に寄り添った作品を発表。難解なトリックや超人的な名探偵を登場させるのではなく、事件の謎を解明していくこうと奮闘する人々の姿がきめ細やかに描かれていると書かれています。雨村自身、「探偵小説の見方」と題し、具体的な例を取り上げて鑑賞方法を読者に説明するなど、探偵小説普及への熱い思いを感じます。

また「探偵新作家現はる」では、アメリカの作家ヴァン・ダインを大絶賛しており、その数年後には彼の小説を翻訳するなど、雨村の精力的な海外探偵小説の紹介も窺えます。

(学芸課/檜垣佳甫)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

「不思議な国わちふいーるど」の世界へようこそ！ 平成30年4月7日(土)～6月24日(日)まで開催。

「不思議な国わちふいーるど」は、絵本作家・池田あきこさんが長年描き続けてきた、猫のダヤンが活躍する物語の舞台です。ダヤンは、今年で誕生35年を迎えます。

本展では、「わちふいーるど」にあるアルスの森を描いた象徴的なイラスト「森のささやき」や人間と動物、自然との共生を伝えようと描いた絵本『森の音を聞いてごらん』を始め、水の底にあるもう一つの不思議な国を旅するダヤンを描いた『アベコベアの月』、タシルの街に暮らすダヤンやジタンやマーシイなど、おなじみのキャラクターの生活を精密に描いた『タシルの街とフォーンの森』、『きらきらお星様』、『ロンドン橋おちた』、『メリーの子羊』などマザーグースの詩を題材にした『フォーチュンカード』、うさぎのメイプルさんに生まれた赤ちゃんを巡って物語が繰り広げられる『うさぎの赤ちゃん』など、人気作品の原画と絵本を中心に紹介します。



「森のささやき」

©Akiko Ikeda/Wachifield Licensing, Inc. 2018

また、トリックを駆使し、昼下がりのタシルの街へ誘う「動く街角」や4枚の絵で構成された不思議な立体絵「スイングタシル」などは、私たちが不思議の世界へと誘ってくれます。

パステルを主体に色鉛筆や水彩による独特の柔らかな画風に、釘付けになること間違いなし。池田あきこさんのギャラリートーク&サイン会などイベントも盛りだくさんです。

この春は、ダヤンや素敵な仲間たちと一緒に、文学館で楽しい時間を過ごしませんか？

(学芸課長／津田加須子)

●ダヤン、高知へ！池田あきこ原画展●

—タシルの街とフォーンの森—

会期中無休 観覧料 500円

ギャラリートーク&サイン会開催！

☆トーク…… 14:00～(約30分)

☆サイン会… 14:30～ ※要申し込み

池田あきこさんをお招きして、ギャラリートークとサイン会を開催します。(※サイン会は当館で対象書籍などをお買い上げの方、先着 100 名様となります。)

- ・日時：平成 30 年 4 月 7 日(土)
- ・場所：高知県立文学館 1 階ホール ・参加費：要当日観覧券
- ・申込：サイン会は、当日、開始の1時間前に参加整理券を配布します。詳しくはお問い合わせください。

館長室から

「精霊の守り人」それぞれの物語

岡崎 順子

2月に入り、あの年末年始の気ぜわしさから、早くも一月余りが経過した。

長年、私にとって新しい年を迎えるために欠かせない行事は、大掃除でもなく、おせち料理作りでもなく、年賀状書きでもなく、ただただ一人で日当たりの良い部屋の片隅にどんと腰をすえ、その年に買った本を片っ端から読み、ひたすらその物語の世界に浸ることである。

本のジャンルはさまざまだが、昨年の一冊は「精霊の守り人」シリーズ。

年末からテレビでも放映された作品であり、ご承知の方も多いのではないかと思う。

読み進むにつれ、「様々に異なる文化や価値観を持つ人々が共に生きる壮大な世界」に思いをめぐらしていた。しかし、これはこの時に私が描いた世界だ。たとえ同じ本を読んでも、全く同じ世界は描かれないう。なぜなら、本を読むとき、私たちは一人一人、様々なイメージや価値観の中で自分だけの世界を築き上げ、自分だけの物語を紡いでいると思うからだ。

文学館では、先月末からこの「精霊の守り人」シリーズを中心にした企画展を開催している。

ぜひ、この企画展に足をお運びいただき、展示されている物語との対話を通じて、お一人お一人に、「精霊の守り人」それぞれの物語を心の中に紡いでいただきたいと思っている。

展覧会報告!

酒と文学展

題字／吉田 類



酒と文学に
酔いしれる企画展、
好評のうちに
閉幕しました!

『土佐日記』から吉田類まで

開館20周年の二十歳の文学館となる記念の年に開催された本展覧会は、『土佐日記』から吉田類まで」という副題の通り、幅広い時代にわたって高知のお酒と文学のかかわりをご紹介します。

展示では入門編として土佐酒の歴史、土

佐酒を愛する人々によって育まれた血鉢や座敷遊びなどの酒文化から、見どころである作家と酒の物語や酒を描いた文学作品の紹介、そして今大変注目を浴びている仁淀川町出身の酒場詩人・吉田類さんの酒場俳句を紹介する特設コーナーを設けました。

各コーナーで当館所蔵のお酒に関する資料を展示したほか、血鉢(高知県立歴史民俗資料館蔵)、中村恭子筆「血鉢絵」(個人蔵)、吉井勇愛用の「はと徳利」(個人蔵)、山内容堂の最後の旅行を描いた「箱根旅行絵巻」(高知城歴史博物館蔵)、「日本全国ノ酒屋ヲ開カントスルノ書」(高知市立自由民権記念館蔵)、吉田類さんの俳画などの資料を借用して展示しました。お酒と文学のエピソードの多さ、面白さに、さすが高知!とお客様から評価して頂き、また、展覧会が資料寄贈のきっかけとなるなど縁ができたことも嬉しく思います。

▲展示室風景



関連企画では、吉田類さんをお招きして、記念講演会と句会イベントを行いました。

映像などを交えて類さんがお話された講演会は大盛況、句会イベントは当館で初めての試みでしたが、とてもアットホームな雰囲気の中進めることができました。朗読の会では安岡章太郎や類さん等のエッセイの他、陶淵明や李白の漢詩を読んで頂くなど普段あまり触れない分野の作品を試み、好評でした。

作家一人を掘り下げていく展覧会も大変面白いものですが、一冊の文学作品だけではと見えない人とのつながりや作家のこだわりが、テーマを設定してあれこれ並べてみると見えてきます。特に今回のテーマである「酒」自体が古くから育まれた文化であり、文学とも昔から深いかわりを持つものなので、「難しそう」という文学の敷居を下げてくれるとともに、文学研究の側面からも多くの興味深い発見に満ちたものとなりました。

なりました。

今後も皆様に文学を楽しんで頂けるような展示を作り上げていきたいと思えます。また今回、多くの皆様にご協力頂き展示が実現しました。お一人お一人に心より感謝申し上げます。
(学芸課／川島禎子)

▲吉田類さん記念講演会



企画展 案内

高知県立文学館 カレンダー 1月～3月

上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展

2018 (平成30年) 1/27(土) ～ 3/25(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

2014年に国際アンデルセン賞作家賞を受賞した上橋菜穂子さん。代表作〈精霊の守り人〉シリーズに描かれる多文化共生を軸として、その卓越した物語世界を紹介します。

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



絵:佐竹義徳
『サグとナグー混じり合う世界』2016年



森のささやき
© Akiko Ikeda / Wachifield Licensing, Inc. 2018

ダヤン、高知へ！ 池田あきこ原画展 —タシルの街とフォーンの森—

2018 (平成30年) 4/7(土) ～ 6/24(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

絵本作家・池田あきこさんが描く〈猫のダヤン〉シリーズのファンタスティックな世界を原画などで紹介します。期間中はダヤングッズの販売コーナーも大展開いたします！

展覧会のご案内をしています！ 詳細は6ページをご覧ください。

●平成30年度 企画展(予定)●

- 🐾 ダヤン、高知へ！ 池田あきこ原画展 4月7日(土) ～ 6月24日(日)
—タシルの街とフォーンの森—
- 🐾 ～デビュー35周年記念～
宮西達也絵本原画展 7月14日(土) ～ 9月2日(日)
- 🐾 寺田寅彦展 (仮) 9月15日(土) ～ 11月4日(日)
- 🐾 探偵 × 文学 (仮) 11月17日(土) ～ 1月14日(月) 平成31年 (祝)
- 🐾 安岡章太郎展 (仮) 1月26日(土) ～ 3月24日(日)

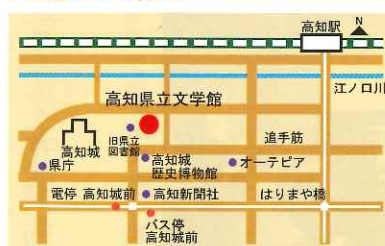
オリジナルクリアファイル(税込250円)や文学館ロゴ入りボールペン(税込800円)
寺田寅彦「いちご図」マスキングテープ(税込380円)、風呂敷(税込2,000円)など
文学館オリジナルグッズ好評販売中です♪



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
駐車場 無料。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶながく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス<県庁前行>
「高知駅前」下車、北へ徒歩5分または
<高知駅行>「はりまや橋」下車、徒歩20分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知駅前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「高知駅前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸の内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857



E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bungaku.com